

幻想を描く時に見るものたちには、何層ものファイルターがかかる。柔らかく奥行きを増し、本来の輪郭を淡くさせている中で、どの層に触れようとしているか、作者の個性を感じながら読ませていただきました。口語詩句賞への投稿、皆様お疲れさまでした。どれもとても心に沁みる、よい作品でした。

吉沢美香 蛇口には星の通った跡紫陽花／夕立を見る心臓のやわらかさ／虹消えて  
眼の中にある水分／今朝の冬半透明の黄の付箋

中の仕組みが見えないものの持つ秘密。暗がりでしか気づけないものを見つけるのが上手い作者。蛇口の銀色の表面に、おそらく蝸牛が這った跡があった。“今”見えない部分に含まれた幻想が活きる。夕立や虹を見ているのは角膜や体の表面だけれど、最奥にまで及ぶ何かがある。夕立の水気に心臓もほぐされ、虹が消えた後も、眼の中の水分にその色彩が凝っている。個人的にも特選で推していた。

李いう子 春の海一人のための降車ボタン／梅雨入りを逃げて琥珀の中にいる／半夏生まばたきだつて水の音／コスマスをくすぐりながら下校班／晚冬の螺旋ばかりの試し書き

入選に選んだ。作者の描くたつた一人の身体感覚に引き込まれる。降車ボタンを押す指、コスマスに触れるてのひら、試し書きをするペンを持つ手のまるみ。こうして書と手の作品が多く、てのひらが自身の断面のようにこの世のものたちを繊細に感じ取ってゆく。「晚冬の螺旋ばかりの試し書き」は月次でも取り上げたが、意味は持たなくとも連綿と続く様々なもののひとつをうまく取りあげた作品だと感じる。

白野 カントリーマアムのない味を・言い合つて言い尽くしてから・渚になつた／薄荷飴みたいな俯瞰を置いていく・たとえば運動会の砂場に／しあわせとしあわせそ  
うな顔が・ずっと離ればなれで米だけ残す  
瑞々しい比喩に対する具体的が生きる。よく作り込まれているし、景がわからないところな

どもないのだけれど、間には果てしない距離があるようを感じる。その真ん中にぽつんと佇む主体の、何処にも行けない孤独がどの作品にもある。戻ることも進むことも、同じくらい寂しい。存在しない味のカントリーマアムや、運動場の砂場に置かれた薄荷飴が主体なのである。

桜望子　風鈴の内臓部分に満ちる闇／人をまだ・諦めないでいる・油彩絵の具で汚す服

風鈴の中のあの空白に見えないだけで風鈴の内臓が満ちている。臓器を搔きまわされることで生まれる涼やかな音色なのだとしたら。見慣れた風鈴が、私たちの生きる世とは違う理にあるのだと思わされる。

長谷川 桜香　雪のこえ開いたままの解剖図／羊羹が肉片めいて漱石忌

自然の音にも、海の波音や葉擦れの音のように聴き入っていいものと、そうでないものがあると感じる。「雪のこえ」は、後者だろう。耳を澄ますほどに、魅入られてしまう。目の前にある解剖図のように、静かだけれど抗えない力で守りたいはずのところまで明らかにされていく。

松下誠一　きのうまで稻妻だったキリンたち／愛されているのに翼が生えている／さん付けに戻してそぞぐ烏龍茶

入選にするか悩んだ。形をもつことで永遠に喪わされる何か。曖昧なままにしておけば許されるものがたくさんあるのに、なぜ言葉にしてしまうのだろう。もう堪えなくてもよい解放と、との形には戻らない諦念とが交じり合う。「さん付けに戻してそぞぐ烏龍茶」が特に良い。沈黙の中で際立つお茶をそぞぐ音。

中矢温　来世あるはず心に象を住まわせて／セプテンバー瞳のなかで混ぜる白／帶電の身体で泳ぐあおみどり／一日を船はあおぞら梳る

入選に選んだ。哀切な中に軽やかさがあり、読んでいて楽しい。詩の中で湿り気を出すのは実はそんなに難しくはない。この軽やかさ・爽やかさは、作者の人間の部分から滲み出した

もの。大切にしてほしい。「セプテンバー…」はまばたきの喩だろうか。「帶電の…」は月次でも取り上げた。「あおぞら」が船に梳られる一人の女性の長い髪だと思うと、空を見上げる普段の仕草に恋をしているようなくすぐつたさが伴う。

こはくいろ まだたましいに・ならないところがかゆい／せんせい、かぎかっこ・閉じたくないです・あとから痛むの知ってるんでしょ

間を置かず核心をついてくる、どきつときせられる作風である。「せんせい…」の作品は月次でも取り上げた。大人になるにつれ、見なくなつたもの・見ない方が楽なものがある。作品を通して問い合わせられることにいつまでも応えられる今までいたいと思わせてくれる。